



日本語の動詞と構文との関係

政治大学日本語文学科 王 淑琴

(一) 今まで行ってきた研究

・日本語の接頭辞・接尾辞の研究

王淑琴 (2006) 「日本語における否定接頭辞『不-』『無-』『非-』の語形成」『東吳外語學報』第23期 pp.125-148 東吳大學外國語學院

王淑琴 (2009) 「『～がたい』の意味の特殊化について—『～がたい』と中国語の『難以～』との対応も含めて—」『台灣日本語文學報』第25期 pp.195-217 台灣日本語文學會

・日本語の複合動詞の研究

王淑琴 (2010) 「『他動詞+上げる』に対応する『他動詞+上がる』の派生条件」『台灣日語教育學報』第14期 pp.102-128 台灣日語教育學會

王淑琴 (2011) 『接頭辞化が見られる複合動詞の研究—動作を表す前項動詞「打ち-」「押し-」「切り-」を中心に—』大新書局

(一) 今まで行ってきた研究

・ 日本語の自他動詞の研究

王淑琴 (2013) 「併存する他動詞について」 『台湾日語教育學報』 21
pp.50-79

王淑琴 (2015) 「和語の自他両用動詞について」 『政大日本研究』 12
pp.67-98

王淑琴 (2016) 「漢語の自他両用動詞の構文的タイプ」 『台湾日語教育學
報』 27 pp.135-164

王淑琴 (2018) 「『切る』『切れる』の意味の対応・不対応について
—『基本動詞ハンドブック』の記述をもとに—」 『台湾日語教育學
報』 31 pp.60-89

(一) 今まで行ってきた研究

・ 日本語の構文の研究

王淑琴 (2017) 「日本語における再帰構文とその位置付け」 『台湾日語教育學報』 29 pp.189-218

王淑琴 (2020) 『日本語の自他両用動詞の研究－「自他対応」「自他交替」との関連－』 政大出版社

王淑琴 (2021) 「BCCWJにおける和語の自他両用動詞の用法調査」 『台湾日本語文學報』 50 pp.47-75

王淑琴 (2023) 「外来語自他両用動詞の使用実態－BCCWJ の調査から－」 『台湾日語教育學報』 41 pp.119-148

(二) 近年行っている研究

・ 日本語の動詞と構文との関係

(A) 自他動詞の意味的な対応・不対応

- ・ 自他動詞の意味的な対応・不対応は大きな研究課題であり、今まで様々な研究が見られる。

(1) a. 袋に砂をつめる。 → 袋に砂がつまる。

b. 委員会が予算案をつめる → *予算案がつまる。

(沼田1989: 200)

(2) a. 花瓶を割った → 花瓶が割れた

b. ウイスキーを水で割った → *ウイスキーが水で割れた

(影山1996:190)

問題点：

用例辞典や国語辞典の記述に基づき語の意味と用例を収集しているが、そのような方法でリストする意味の数が多く、意味の対応・不対応の状況を類型化するのが難しい。

解決法：

コーパスとコーパスツールを使用する

王淑琴(2018)では、『基本動詞ハンドブック』の意味記述をもとに「切る」と「切れる」の意味の対応・不対応を考察した。

『基本動詞ハンドブック』とは

・ 語義ごとの文型（格パターン）、コロケーション、コーパスからの用例、誤用解説など、ほかの国語辞典には見られない豊富な情報を提供している。その執筆の際に主にNLB、NLT（コーパスツール）が利用されている。

- ・『基本動詞ハンドブック』における意味記述は、例えば、「<人> が <道具> で <もの> を切る」のように、動詞の意味を構文のレベルで表示し、また、格名詞（< > の中の名詞）の意味をまとめて意味分野のレベルで表示するので、動詞の意味を体系的に記述できるというメリットがある。

- ・多義語の別義間の派生関係も示されており、それを意味記述の研究にも応用できる。

→『基本動詞ハンドブック』は自他動詞の意味的な対応を考える際の強力なツールとなる。

コーパスの活用

『基本動詞ハンドブック』に示される用例は限られているので、対応する自他動詞用法がない場合はBCCWJ（『現代日本語書き言葉均衡コーパス』）で用例を探し、BCCWJ で用例があれば意味が対応するものと扱う。『基本動詞ハンドブック』に示されず、BCCWJ でも見つからない場合は、意味が対応しないものと扱う。

調査結果

(表) 『基本動詞ハンドブック』の意味記述に基づく「切る」「切れる」の意味の対応・不対応一覧表

考察

対応状況がかなり複雑であり、いくつかの類型に分けて、考察する必要がある

- ・ 典型的な他動詞文 — ①「切る」が具体的な動作を表す場合
— ②「切る」の意味が抽象化した場合
- ・ 非典型的な他動詞文 — ③無生物主語他動詞
— ④再帰構文
- ・ 慣用句化した意味 — ⑤

- ・典型的な他動詞文 ー①「切る」が具体的な動作を表す場合

「切る」の主語が動作主を表し、その動作主が何らかの道具や方法を用いて「～を切る」という動作を完遂させる場合は、自動詞用法が成立しにくい。

4. <人>が<閉じているもの>を切る

(3) 私がその手紙を見つけたときにはすでに封が切られていた。 (*封が切れていた)

9. <人>が<患部>を切る

(4) 「腫瘍がこれ以上大きくなるようだったら、切ろうか?」 「でも手術はこわいんです…」 (*腫瘍が切れる)

27. <人>が<カード>を切る

(5) ゲームを始める前に、同じカードが重ならないようにカードをよく切ります。 (*カードが切れる)

・これに対し、対応する自動詞用法を持つものは「～を切る」の動作を完遂させるのに道具や方法を指定しないものである。

12. <人>が<ものの水分>を切る

(6) 「おいしいサラダを作るコツは何ですか？」 「野菜の水をよく切ることです。」

4. <ものの水分>が切れる

(7) 野菜は水がちゃんと切れていれば、シャキッとした触感が楽しめます。
→「水を切る」：どのような道具や方法を用いて物の水分をなくしてもいい。

なぜ何らかの道具や方法を用いる「切る」の意味は、対応する自動詞用法が成立しにくいのか。

佐藤（2005）は「相対他動詞」（対応する自動詞を持つ他動詞、例えば「つける」）と「絶対他動詞」（対応する自動詞を持たない他動詞、例えば「塗る」）の成立条件を論じ、具体的で物理的な動きを表す例で検証している。

例えば、「ペンキをつける」と「ペンキを塗る」を比べると、

「ペンキをつける」：動作主がどのようなやり方で動作してもよく、意図した結果を達成していれば問題はない。

「ペンキを塗る」：動作主の動きのあり方がどのようなものでも構わないというわけにはいかず、動作主が対象の表面と平行に自分の身体部分を動かした場合にしか使うことができない。

(8) (ハケをペンキにひたして壁に着色した場合)

太郎が壁にペンキをつけた。

(9) (バケツ入りのペンキを壁に投げかけて着色した場合)

太郎が壁にペンキをつけた。

(10) (ハケをペンキにひたして、壁に着色した場合)

太郎が壁にペンキを塗った。

(11) (ペンキ入りのスプレーを壁に平行に動かして着色した場合) 太郎が壁にペンキを塗った。

(12) (バケツ入りのペンキを壁に投げかけて着色した場合)

? 太郎が壁にペンキを塗った。

(13) (スプレーのボタンを一押しして着色した場合)

? 太郎が壁にペンキを塗った。

(佐藤2005: 174, 176-177)

→動作様態の特定性があれば相対他動詞が不成立、つまり、絶対他動詞になるということである。

・「切る」は「切れる」と意味が対応する用法と対応しない用法があるが、「切れる」と意味が対応しない用法は、「絶対他動詞」と見なすことができる。

→特定の道具や方法を必要とする動作は、動作の様態が指定されるので、動作主が事態のプロセスに参与するイメージが強く、動作の結果のみに焦点を当てるのが難しい（自動詞用法が成立するには、動作結果に焦点を当てる必要がある）。

- ・ 典型的な他動詞文
 - －①「切る」が具体的な動作を表す場合
 - －②「切る」の意味が抽象化した場合
- ・ 非典型的な他動詞文
 - －③無生物主語他動詞
 - －④再帰構文
- ・ 慣用句化した意味
 - －⑤

②③④⑤の考察を省略する。

(B) コーパスにおける使用実態の調査

王淑琴（2023）では、BCCWJのデータに基づいて外来語の自他両用動詞の使用実態を調査している。

研究目的

- ・従来の自他両用動詞の研究について、和語や漢語に絞るものが多く、外来語を取り上げるものが少ない。
- ・外来語の自他両用動詞についての研究はいくつかあるが、実際にどのように使われているかなどその使用実態が不明である。
- ・この研究では「現代日本語書き言葉均衡コーパス」（BCCWJ）を調査対象にし、外来語自他両用動詞の使用実態を明らかにするのが目的である。

研究課題

- (a) 外来語自他両用動詞にはどのようなものがあり、自他両用が成立する場合、どういう格名詞と共起しどのように使われているか。
- (b) 外来語自他両用動詞の他動詞文と「させる」文はどのような使用傾向が見られるか。

研究課題(a)と先行研究との関連

・ 外来語の自他両用動詞についての研究は、田川（2016、2018）、ビタン（2017）、北澤・王（2021）がある。

①田川（2016、2018）は、外来語サ変動詞の自他動詞用法を調査し、自他両用タイプ、自他両用の疑いがあるものを次のように指摘している。

自他両用タイプ、自他両用の疑いがあるもの

（給料が／を）アップする、（新店舗が／を）オープンする、（新生活が／を）スタートする、（供給が／を）ストップする、（担当が／を）チェンジする、（5つの作品が／を）ノミネートする、（車が／利益の一部を）バックする、（店が／を）リニューアルする、（時間が／を）ロスする、（道具が／を）スイッチする、（情報が／サイトを）リンクする。 （田川2016、2018）

→問題点：

自他両用の判定を実例や辞書による確認と田川の内省によって行うものであり、それらの自他両用動詞が実際にどのように使われているかが分からない。

②ビタン（2017）は、外来語サ変動詞の自他の計量的分布を調査するものであり、どのような用法があるかは指摘していない。

③北澤・王（2021）は外来語サ変動詞の使用実態を調査し、自他両用のものについて、『明鏡国語辞典初版』或いは『岩波国語辞典第七版』で「自他両用サ変動詞」と認定される次の12語の外来語自他両用動詞をさらに「聞蔵II」に基づいて、その他動詞用法、自動詞用法、「させる」文、「される」文を調査した。

「アップ」、「オープン」、「リード」、「コメント」、「ダウン」、
「ストップ」、「サイン」、「サービス」、「オーバー」、「リフレッシュ」、
「チェンジ」、「スライド」

問題点：

北澤・王（2021）は自他両用動詞の自他用法の使用傾向を調査しているが、一部の格名詞しか調査していないので、全体的にどのような格名詞と共起する場合に自他用法が成立するかが分からない。

・例えば、「アップ」について、その前接する名詞「～力」「～率」「～度」「写真」との共起を調査し（表1）の結果を明らかにしているが、それ以外の格名詞との共起状況が分からない。

（表1）「アップ」に前接する名詞別の用例数（北澤・王2021: 26）

格名詞	スル自	サレル	スル他	サセル	合計
～力	371	1	214	234	820
～率	229	14	117	144	504
～度	107	0	54	73	234
～写真	0	18	66	0	84

研究課題 (b) と先行研究との関連

③北澤・王（2021）は、外来語自他両用動詞の他動詞文と「させる」文の選択にかかわる特徴を表2のようにまとめている。

（表2）「外来語スル（他動詞用法）」と「外来語サセル」の関係（北澤・王2021: 59）

	外来語スル（他動詞用法）	外来語サセル
1	【主体が対象をコントロールできる】	【外部からの原因がある】
2	【理由や意図、経緯を表す文要素を含まない】	【理由や意図、経緯を表す文要素を含む】
3	【単に事態、動作を説明する】	【間接的な方法手段が明示されている】
4	【単に事態、動作を説明する】	【外部からの原因がある】
5	【理由や意図、経緯を表す文要素を含まない】	【理由や意図、経緯を表す文要素を含む】
6	【主体性が強い】	【プロセス性が強い】
7	【聞き手への働きかけを表すモダリティが生起しやすい】	【主体性が弱い】

(14) ゴールデンウィーク中には数多くのイベントが予定されており、県東部の良さと「東部博」の知名度をアップしたい考えた。

(2015年 04月 29日 朝刊 高知全县・1 地方) (北澤・王2021: 57)

→ 「アップ」という結果に注目し、【理由や意図、経緯を表す文要素を含まない】という点が特徴的である。

(15) 具をご飯の下にうずめる郷土料理「うずみ」で福山の知名度をアップさせようと、福山市がうずみ弁当のレシピと、底にひそませる「メッセージ」の募集を始めた。(2015年 12月 05日 夕刊 1 社会)

(北澤・王2021: 57)

→前後に満足度と認知度をアップするために何をやるべきかという紹介であるので、【理由や意図、経緯を表す文要素を含む】と述べている。

問題点：

- ・ (表2) の違いは個別の用例を説明するのに有効であるが、他動詞文と「させる」文の全体的な使用傾向が見えない。

→(a)の調査結果に基づいて、外来語自他両用動詞の他動詞文と「させる」文の使用傾向、つまり、研究課題(b)を明らかにする。

資料収集

- ・二段階作業で資料を収集した。

第一段階：

外来語動詞全体において、自他両用動詞がどれぐらいあるかを調査し、その格名詞を記録する。

→512語の調査対象のうち、自他両用と認定された動詞はわずか20語である。

第二段階：

BCCWJの検索アプリケーション「中納言」のサイトでこれらの動詞を含む用例を抽出して、動詞と格名詞による他動詞文、自動詞文、「させる」文、「される」文を認定し、それぞれの用例数を計算した。

用例の集計は以下の原則による。

① 格名詞の下位分類を表すものをまとめて集計する。

例えば、「足／左足／千鳥足をステップする」の用例をすべて「足をステップする」の用例として集計する。

②動詞の派生語（例えば「再スタート」）や複合語（例えば「バージョンアップする／スケールアップ／学力アップ」）は、合成語になることで動詞の自他性に影響が出る可能性があり集計しない。また、「～しやすい」「～しにくい」の用例は自他の判別ができないので処理しない。

③次のような名詞修飾節内の動詞が被修飾名詞と格関係にあるものは、自他の判別ができないので集計しない。

(16) 美術館は近年オープンしたホテル・ニューオータニガーデンコート 6階にあり、「第一回東山魁夷記念日経日本画大賞展」が日本経済新聞社の主催で開催された。

④ 格助詞、格名詞の省略、とりたて助詞にとってかわられた助詞を次の原則に基づいて処理を行う。

(a) 動詞と共起する文型や使われる構文。

例えば、意志や願望表現と共起するものを他動詞文と認定する。

(17) 金運は大寒の卵でアップしましょう。

(18) 少しずつ練習に行くこと自体に体をならしながら・・・体力UPして

いきたいなと思う次第です。

(b) 動詞文の前文。

・前文に条件節（～と、～ば）やそれに準ずるものが来て、文全体が「その状況のもとである結果状態が生じる」という意味を表す場合、後文が自動詞文であると考えられる。

(19) トランクコンビンーションバーをセットで使用すれば、4点支持となり剛性もさらにアップしちゃうぞ。
→自動詞文と数える。

(c) 動作主の存在や文脈の話題。

(20) 二十一世紀の劈頭。平成十三年（二千一）一月一日。いよいよ待望の新東京宝塚劇場はオープンした。
→劇場が始まる状態を引き起こす動作主が不明であり、自動詞文とする。

格助詞、格名詞が省略されたもの、助詞がとりたて助詞にとってかわられたものを除外してもよいが、排除されるものを最小限にしたい。

調査結果

(表3) BCCWJにおける外来語自他両用動詞とその格名詞による各種類の文の用例数

- ・自動詞文がもっとも多く使われ、用例全体の半分以上を占めていることが分かる。
- ・各動詞の用例数が少なく、用例数の総計が100例を超えたのは「アップする」「スタートする」「オープンする」の三つの動詞のみである。

調査結果（「アップする」の場合）

(表4) 「アップする」とその格名詞による各種類の文の用例数

動詞	格名詞	他動詞文	自動詞文	「させる」 文	「される」 文	合計
アップする	～運	16	64	8	0	88
アップする	～力	13	58	23	2	96
アップする	～度	10	40	10	0	60
アップする	～率	8	53	12	0	73
アップする	～さ	2	16	3	0	21
アップする	～感	3	10	4	0	17
アップする	～性	3	12	6	0	21
合計		55	253	66	2	376

・格助詞は、力（「～力」）や運（「～運」）、度合（「～率」「～度」）、性質（「～さ」「～性」「～感」）を表すものである。

つまり、両用動詞として使われる「アップする」は、その自動詞文は力や運、度合、性質が高まるという意味を表し、他動詞文は人間や物事が力や運、度合、性質を高めるという意味を表す。

(21) 西方位にはお金に関するものを置き、北方位にはフルーツの絵やフルーツがモチーフのものを、東南方位には観葉植物を置くと金運がアップします。

(22) 財布が汚れていると金運が下がってしまいますよ。大寒の卵を食べて金運をアップしましょう。

調査結果（「スタートする」、「オープンする」の場合を省く）

以上で研究課題(a)が明らかになったと思われる。

(a) 外来語自他両用動詞にはどのようなものがあり、自他両用が成立する場合、どういう格名詞と共起しどのように使われているか。

研究課題 (b) について

- ・ 漢語動詞、外来語動詞は文法の働きを持つ形態素で自他性を示すので「文法的ヴォイス」と呼ばれ、自他動詞のような「語彙的ヴォイス」と区別される（寺村1982、野田1991）。
- ・ 漢語動詞、外来語動詞の場合、形態的に対応する自他動詞対がないので、自動詞用法が基本の動詞は「させる」形で他動詞の役割を、他動詞用法が基本の動詞は「される」形で自動詞の役割を果たさせると指摘されている（庵等2001）。
- ・ 自他両用動詞は、自他用法を併せ持っているので自動詞文、他動詞文のほかに、「させる」文と「される」文も見られるはずである。

→しかし、（表3）を見るとから「される」文を持たない自他両用動詞が多く全体でも15例しかなく、外来語自他両用動詞の場合、自動詞用法はほとんど自動詞文によって果たされている。

- ・ これに対し、他動詞文も「させる」文も一定の用例数があり、その出現環境に違いが見られるかが興味深い。
- ・ この研究では「アップする」「スタートする」「オープンする」を対象に構文タイプからその他動詞文と「させる」文の使用傾向を見る。

他動詞文と「させる」文の類型化

・他動詞文も「させる」文も起因作用 (causation) – 「誰か／何かは何らかの出来事を引き起こす」 – という意味内容を表す (荒井1991: 83) ので、表現できる構文の種類に類似性が見られると考えられる。

→この研究では他動詞文と「させる」文を【動作型】構文と【原因型】構文に分け、その分布の違いを見る (以下では「XがYをする／させる」と示す)。

【動作型】構文：Xが直接、或いは間接的にYに働きかけて、Yの状態変化を引き起こすという意味を表す。

→Xが人間を表し、Yがものを表す文が典型的である。

(23) **ぼくが**初めて自分で目標を設定したのは、**最初の店を**オープンしたときです。

(24) **理沙は**、もう、アクセルを踏んで、**車を**スタートさせていた。

→Xが組織を表す文は、XがYの状態変化の引き起こし手であり、この種類の構文であると考えられる。

(25) **陸軍兵器局は**千九百三十八年、当時量産が始まっていたⅢ号、Ⅳ号戦車の後継となる**新型戦車の開発を**スタートした。

(26) **地元大手は**新業態店をオープンさせ、火災の影響で閉鎖していたライバルの巨艦店は再オープンにこぎつけた。

【原因型】構文：XがきっかけでYが表す事態や状態の変化が起きるという意味を表し、Xに物や出来事を表す名詞が来るという特徴がある（佐藤1990、青木2006）。

→Xが物を表す名詞

(27) 北方位は仕事運や信頼度、不動産運をアップしてくれます。

(28) ハーブは西洋の漢方薬ともいわれ、その薬効成分により、血行を促進して、免疫力をアップさせます。

→Xが出来事を表す名詞

(29) 毛足の長いフリンジには、ラグジュアリー感をアップする上品なラメ加工が施されています。

(30) また、家族団らんは仕事運をアップさせます。

【動作型】構文：

- ・「誰かが何らかの状態変化を引き起こす」という意味を表す。
- ・Xに人間、或いは組織を表す名詞が来る。

【原因型】構文：

- ・「何かが何らかの事態や状態の変化を引き起こす」という意味を表す。
- ・Xに物や出来事を表す名詞が来る。

→格名詞Xの違いでほとんどの文を類型化できる。

中には格名詞の特徴と構文の種類が対応しないものもある。

(31) 4月ですからね、このブログも新しいカテゴリの楽しい記事をたくさん
のせて、顧客満足度をUPしなくてはねっ（鼻息）！

→「ブログ」は組織ではなく物名詞を表しているが、文の意味から見ると
「ブログを管理する人間」の意味を表すので【動作型】構文に分類する。

調査結果：「アップする」の場合

(表5) 「～をアップする／させる」の構文タイプ

	【動作型】	【原因型】	合計
「～をアップする」	44 (80%)	11 (20%)	55 (100%)
「～をアップさせる」	37 (56%)	29 (44%)	66 (100%)

【動作型】構文：「～をアップする」が「～をアップさせる」より多く使われている。

【原因型】構文：「～をアップさせる」が「～をアップする」より多く使われている。

→js-star (<https://www.kisnet.or.jp/nappa/software/star/index.htm>) の直接確率計算 2×2 表(Fisher 's exact test)を用いて検定を行った結果、両側検定で $p=0.0066$ 、有意差が見られた。

→つまり、【動作型】構文か【原因型】構文かは「～をアップする」「～をアップさせる」の選択と関連しているということが言える。

→「アップする」の場合、他動詞文と「させる」文の担う機能が分化していることが窺える。

「アップする」の【動作型】構文の場合

同じく【動作型】構文に属する「アップする」の他動詞文と「させる」文を見る。

- 「～をアップさせる」は前に手段を表す節（連用形やテ形によって後文に接続し、後文の手段を表す節）が伴われる例が多く見られる。

(32) 料理研究家・栗原はるみ氏と共同開発したオーブンレンジ。（中略）
加えて、側面と奥面に熱反射率の高いフッ素塗装を施し、熱効率をアップさせた。

(表6) 「アップする」の【動作型】構文の前文に手段節が伴われる文の数

【動作型】	前文に手段節を伴う文
「～をアップする」	44例のうち21例（全体の48%）
「～をアップさせる」	37例のうち23例（全体の62%）

→割合で見ると「～をアップさせる」の方が高い。

→「～をアップさせる」の前に手段節が多く現れることは、「～をアップさせる」はより動作性の高い文脈で使われていることを示唆している。

「アップする」の【原因型】構文の場合

同じく【原因型】構文に属する「～をアップする」と「～をアップさせる」の違いを見る。

→「させる」文を使うことによって因果関係をより明確に示すことができる。

(33) 支援戦闘機のモデルとなったのはX - 二十四であった。搭載予定のロケットモーターは、WH - 5バージョンが、石川島播磨重工で完成していた。WH - 5は、燃料消費効率を大幅にアップさせ、スピードをマッハー．五に抑えた。

→「させる」文を使うことで、主語の「WH - 5（バージョンのロケットモーター）」は支援戦闘機の燃料消費効率が大幅に上がる原因であるということを明示できる。

→この文でもし他動詞文を使うと、再帰的な読みも可能になる、つまり、WH - 5は自ら燃料消費効率が上がる状態を所有するという意味にも解釈できる。

→「させる」文を使ったほうが、WH - 5と支援戦闘機の燃料消費効率が上がることとの間の因果関係が明確である。

・日本語の再帰構文は「他者への働きかけ」といった意味的特徴をもたないため、自動詞に近づいている（仁田1982、高橋1975、工藤1991）。

(34) 子どもは手を叩いて喜んだ。 (仁田1982: 87)

(35) 一週間前の大嵐で、発動機船がスクリュを毀してしまった。
(高橋1975: 3)

(36) 通りの家は全部戸を入れていた。 (工藤1991: 29)

→ 「させる」文を使うことで再帰的な読みを避け、主語とそれにより引き起こされる事態や状態との間の因果関係を明示できる。

【原因型】の「～をアップする」と「～をアップさせる」のうち、前に手段節や原因節が伴われる文の割合を(表7)にまとめる。

(37) ハーブは西洋の漢方薬ともいわれ、その薬効成分により、血行を促進して、免疫力をアップさせます。

(38) 免疫細胞はこの情報を受けて、免疫力をアップさせていますが、腸が老化し、悪玉菌が増えると、スムーズに情報が交換できません。

(表7) 「アップする」の【原因型】構文の前文に手段節・原因節が伴われる文の

【原因型】	前文に手段節・原因節を伴う文
「～をアップする」	11例のうち0例 (全体の0%)
「～をアップさせる」	29例のうち6例 (全体の21%)

→より因果関係を明確にしたいときに「させる」文が使われることが窺える。

「スタートする」「オープンする」の考察を省略

結論：

【動作型】構文で「させる」文は動作性を高める働きがあり、【原因型】構文で「させる」文は主格名詞とそれにより引き起こされる事態や状態との間の因果関係を強める働きがある。

研究課題(b)

外来語自他両用動詞の他動詞文と「させる」文はどのような使用傾向が見られるか。

参考文献

- 青木博史 (2006) 「原因主語他動詞文の歴史」 『筑紫語学叢書Ⅱ—日本語史と方言—』 風間書院pp. 274-293
- 荒井文雄 (1991) 「日本語における起因述語—他動詞と使役動詞の意味論—」 『京都産業大学論集 外国語と外国文学系列』 18京都産業大学pp. 82-150
- 庵功雄等 (2001) 『中上級を教える人のために日本語文法ハンドブック』 スリエーネットワーク
- 王淑琴 (2006) 「日本語における否定接頭辞『不—』『無—』『非—』の語形成」 『東吳外語學報』 第23期 pp.125-148 東吳大學外國語學院
- 王淑琴 (2009) 「『～がたい』の意味の特殊化について—『～がたい』と中国語の『難以～』との対応も含めて—」 『台灣日本語文學報』 第25期 pp.195-217 台灣日本語文學會
- 王淑琴 (2010) 「『他動詞+上げる』に対応する『他動詞+上がる』の派生条件」 『台灣日語教育學報』 第14期 pp.102-128 台灣日語教育學會
- 王淑琴 (2011) 『接頭辞化が見られる複合動詞の研究—動作を表す前項動詞「打ち—」「押し—」「切り—」を中心に—』 大新書局
- 王淑琴 (2013) 「併存する他動詞について」 『台灣日語教育學報』 21 pp.50-79
- 王淑琴 (2015) 「和語の自他両用動詞について」 『政大日本研究』 12 pp.67-98

- 王淑琴 (2016) 「漢語の自他両用動詞の構文的タイプ」 『台灣日語教育學報』 27 pp.135-164
- 王淑琴 (2018) 「『切る』『切れる』の意味の対応・不対応について—『基本動詞ハンドブック』の記述をもとに—」 『台灣日語教育學報』 31 pp.60-89
- 王淑琴 (2017) 「日本語における再帰構文とその位置付け」 『台灣日語教育學報』 29 pp.189-218
- 王淑琴 (2020) 『日本語の自他両用動詞の研究—「自他対応」「自他交替」との関連—』 政大出版社
- 王淑琴 (2021) 「BCCWJにおける和語の自他両用動詞の用法調査」 『台灣日本語文學報』 50 pp.47-75
- 王淑琴 (2023) 「外来語自他両用動詞の使用実態 —BCCWJ の調査から—」 『台灣日語教育學報』 41 pp.119-148
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』 くろしお出版
- 佐藤里美 (1990) 「使役構造の文(2) —因果関係を表現するばあい—」 『ことばの科学4』 むぎ書房 pp. 103-157
- 佐藤琢三 (2005) 『自動詞文と他動詞文の意味論』 笠間書院
- 北澤尚・王潘琳 (2021) 「現代日本語の外来語サ変動詞のヴォイスについての記述的研究」 『東京学芸大学紀要. 人文社会科学系. I』 72東京学芸大学教育実践研究推進本部 pp. 9-61

- 工藤真由美 (1991) 「アスペクトとヴィオス」『現代日本語のテンス・アスペクト・ヴォイスについての総合的研究』横浜国立大学1988-1990年度科学研究費報告書pp. 5-40
- 高橋太郎 (1975) 「文中に現れる所属関係の種々相」『国語学』103日本語学会 pp. 1-17
- 田川拓海 (2016) 「動名詞の構造と「する」「させる」の分布—漢語と外来語の比較—」、庵功雄・佐藤琢三・中俣尚己 (編) 『日本語文法研究のフロンティア』くろしお出版pp. 1-20
- 田川拓海 (2018) 「外来語動名詞の形態統語研究に向けて：範疇、語種、形態構造」『文芸言語研究』74筑波大学大学院人文社会科学研究所 文芸・言語専攻 pp. 39-58
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版
- 沼田善子 (1989) 「日本語動詞 自・他の意味的対応(1)—多義語における対応の欠落から—」『研究報告集』10 国立国語研究所 pp. 193-215
- 野田尚史 (1991) 「文法的なヴォイスと語彙的なヴォイスとの関係」仁田義雄 (編) 『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版pp. 211-232
- ビタン マダリナ (2017) 「外来語サ変動詞の自他の計量的分析」『筑波日本語学研究』21筑波大学人文社会科学研究所日本語学研究室pp. 106-114

ご清聴ありがとうございました。